

令和五年度 入学試験問題

国語

合図があるまで、問題用紙を開かず左の注意をよく読みましょう。

〔注意〕

- 一. この試験問題の解答時間は五十分です。
- 二. 答えは、すべて解答用紙に書きなさい。
- 三. 始める前に、解答用紙の決められた場所に受験番号・氏名を書きなさい。
- 四. この問題は十三ページあります。ページの不足や乱れがあったら、声を出さずに手をあげなさい。
- 五. 印刷のはっきりしない所があったら、声を出さずに手をあげなさい。
- 六. 問題を読むのに声を出したり、音をたてたりしてはいけません。
- 七. 問題文や問いの中にある言葉の意味についての質問にはお答えしません。
- 八. 字数を数える場合は、句読点や記号も一字として数えなさい。

問題一

次の各問いに答えなさい。

問一

次の——部アウエのカタカナを漢字に直しなさい。なお送りが必要な場合はひらがなで補うこと。  
〔ア〕シオカゼに吹かれる。 ①君のねばりにコウサンだ。 ②連山が夕日にハエル。 ③私鉄のエンセンに住む。〕

問二

次のアウエから——部が述語でないものを一つ選び、その記号を書きなさい。  
ア 姉がピアニストになる。  
イ たくさんの魚がいるよ。  
ウ 絶対に許さない、ぼくは。  
エ あたりはとても静かだ。

問三

次のアウエから——部が主語であるものを一つ選び、その記号を書きなさい。  
ア 六年一組の合唱だ。  
イ 植物だつて生きています。  
ウ 楽しいから、続けられます。  
エ あつ、地震だ。

問四

次のABの□にそれぞれ同じ漢字を入れ、二字の熟語を作ります。最もふさわしい漢字を次のアウエからそれぞれ一つずつ選び、その記号を書きなさい。

A	不	見	選	担	ア	当	イ	等	ウ	利	エ	人
B	合	段	別	規	ア	則	イ	体	ウ	流	エ	格

問五

次の文の□に体の一部を表す漢字を入れて、慣用句を完成させなさい。  
A □が立たない。……相手が強くてとてもかなわないこと  
B □から火が出る。……恥ずかしい思いをすること

問題二 次の文章は、「昔話の扉をひらこう」（小澤俊夫）の一節です。これを読んで、あとの各問いに答えなさい。

今、なぜ昔話が大切なのか。これには三つのわけがあります。

まず、ひとつ目は、昔話は長いこと人々の間で語り継がれてきたので、いつのまにか、そこに、「人が暮らしていく上での知恵」や、「子どもの成長についての観察」が込められているということです。

そして昔話は、子どもや若者や娘のことを語る人が多いのです。若者がいろいろな失敗をしたり、怖い目にあいながら、あるいは、いろいろないじめにあいながら、なんとかそれを克服していく姿。それは、①昔話の中心的な話題です。

子どもの成長する姿は、どの親にとっても初めて見ることなので、いちいち戸惑うことばかりです。「うちの子は寝てばかりいるけど、どうしよう」「うちの子はちっとも働かないけど、どうしよう」「うちの子は周りの子より劣っているようだけど、大丈夫かしら」。

A 昔話は、語り継がれてゆく中でいろんな子どもの成長を見てきているので、ちっとも驚きません。「寝てばかりいる子も、いつか必ず起きるよ」と語ってくれているし、「何かに劣っているように見えても、何かに優れているもんだよ」と語ってくれているのです。親は自分の子のことしか知らないけれど、昔話はたくさんの子の成長を見てきているので、でんと構えていてくれます。そして、「人間への信頼」を語ってくれているのです。なぜなら、世の中の人みんな、なんのかの心配しながら、広い目で見れば、そして長い目で見れば、なんとかやってきているからです。

昔話というと、教訓話といわれることがあります。実際に読んでみると、間抜けな主人公ばかり出てくるのです。なまけものとか、寝てばかりいた男とか、それから、役立たずの子どもとか。そういう子が力を発揮していく。だから、昔話は愛されるのでしよう。

B 実際は、人の目に見えないところでコツコツと働いて、畑をちゃんと守っていてくれたとか、いろんなことがあるわけです。「人間って、目立たなくて役立たずみたいだけど、実は、ちゃんとやっているんだよ、それが、あとで実ることもあるんだよ」と、昔話は、人間のいろんな側面を語ってくれています。

昔話の根底には、そういう、② がでんと構えていると思うのです。

今はいろいろな情報が飛び交い、子どもについてもなんとなく不安な気持ちにさせられます。そういう今だからこそ、長い年月、多くの人によって語られてきた昔話に耳を傾けることが大切だと思うのです。

ふたつ目に大切なことは、お話を耳で聴いたとき、場面が見える文章であることです。

昔話は長い年月、たくさんの人によって語り継がれてきたので、聴き手にとって、聴いてわかりやすい言葉で、わかりやす



い文章になっています。いわば、素朴な文章であり、そこにはしっかりと語りの法則さえ生まれているのです。それは、繰り返しのリズムを持つていること、シンプルでクリアな語り口であることなのですが、これは世界中の昔話に共通しています。

けれども、現代、本や絵本になっている昔話は、目で読む児童文学のような文章に作り直されていることが多く、耳で聴く語りの法則が消えていたり、大切なメッセージが削ぎ落とされていくこともあるのです。③伝承されてきた昔話の本来の姿を知ってほしいと思います。どうか昔話を壊さないで、次の世代に渡してほしい。そのことについては、五の扉を読んでいただきたいと思います。

そして、大切に思うわけが、もうひとつあります。

それは、昔話が身近なおとなの生の声で、直接、子どもの耳に入ることです。農村でおいちゃんやおばあちゃんが子どもにお話を語る時、ほとんどが囲炉裏のまわりとか、こたつにあたりながらでした。子どもは、同じ声を、ごく身近で、毎晩のように聴いたのです。

④人の声は不思議な力をもっています。声はいつまでも耳に残ります。おいちゃんの声が耳に残っている人は、自分がおじいちゃんに愛されていたことを感じるでしょう。子どものときには別に意識しないで聴いていた親の声、祖父母の声を、あとで思い出して、自分が愛されていたことに気がつくこともあるでしょう。

今はいろいろな方法で、機械を通した声やお話が子どもの耳に入ってきます。ラジオ、テレビ、CD、スマホ、インターネット。それは便利なことです。けれども、子どもが、自分が愛されていることを感じられるのは、生の声だけです。

だからわたしは、どうかお話を、あなたの生の声で子どもに読んで聴かせてやってもらいたいと思うし、覚えて語ってやってもらいたいと思うのです。お話は中身がありますから、それが、生の声で聴こえたら、必ず子どもの心に残ります。

聴いたそのときから心に残るとは限りません。忘れてしまうことだって、もちろんあります。けれども、声に担われて聴いたお話は、何年もたってから、ふと、子どもの心によみがえることだってあるのです。もう子どもとはいえない年齢になっても、思い出すことさえあるのです。それが、お話の不思議さだし、声というものの不思議さなのです。

お話を覚えて語るなんてできない、と思っていらいっしやる方が多いと思うのですが、それには、わたしの秘策があるので、六の扉の「昔話の覚え方」のところで読んでみてください。そして、試みてください。案外、むずかしくはないのです。

もちろん日常生活のなかでのやり取りも大事です。そういうやり取りの中で、子どもたちは、いつのまにか、自分が愛されていること、守られていることを感じるでしょう。

その上に、あなたの声でお話を聴くと、お話の内容とあなたの声と一緒に、⑤子どもの生きる力を励ましてくれるで



しょう。

前に書いたとおり、わたしは農村に行つて、村のお年寄りから昔話を聴かせてもらうことを、長年してきました。そういうとき、語ってくれるお年寄りは、例外なく、子どものころ、自分に聴かせてくれたおじいちゃんやおばあちゃんのことを思い出して、懐かしんでおられました。そういう場面に出会ったたびに、わたしは、お話の持つ力、そして声の力に、震えるほど強い感銘を受けたのでした。

そして、今、思うのです。

いろいろな技術が進歩して、情報の量も大量です。それは生活を豊かにしているでしょう。けれども、子どもの成長を内から支えてくれるのは、まわりの人の生の声なのです。

お友達の声、先生の声、身近なおとなの声、身内の人の声……。

おとなたちは、日常生活の中で、子どもたちにたくさん声をかけてやってもらいたいと思います。

子どもが学校から帰ってきて、今日いちにちにあったことを報告したら、忙しいでしようけれども、ちゃんと耳を傾けて聴いてやってください。そして、はっきり「そう」とか「へええ」とか、相槌を打って、返事をしてやってください。

「あなたの話をちゃんと聴いているよ」ということを示してほしいと思うのです。

すると、子どもは手ごたえを感じて、張り切つて報告するでしょう。そして、子どもは、ますます自分の存在が認められたことを感じるのです。

これは、子どもの成長にとって、決定的に重要なことだと思えます。言葉は、人間と人間を結びつけるものだからです。

「ぼくは、わたしは、お父さんに、お母さんに認められているんだ」という自覚。これは、手探りで成長している最中の子どもにとつては、大きな、大きな、そして堅固な土台です。

これから長い人生を歩いていく子どもたちに、あなたの声をプレゼントしてください。

子どもたちは、これからの人生で、いろいろなことを経験していくでしょう。そういう人生を、元気に生きていくための励ましになる声を、子どもたちにたくさん聴かせてやってください。

## 問一 本文9行目

A

・17行目

B

に入る接続詞として適切なものを次のア～エからそれぞれ一つずつ選び、その

記号を書きなさい。

- 〔ア あるいは イ そして ウ だから エ ところが オ たとえば〕

問二 本文5行目「①昔話の中心的な話題」とありますが、その話題として適切でないものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 他人にはない欠点を持つ若者が、誰にもさとられることなくひっそりと生きていくという話。  
イ 周囲から嫌がらせを受けている若者が、知恵をしぼりながら必死に生きていこうとするという話。  
ウ 特別な才能を持たない普通の若者が、平凡な日常を送ることで幸せをつかんでいくという話。  
エ 目立たずにひっそりと暮らす若者が、地道な行動をすることで大きな成果につながるという話。

問三 本文20行目  ② にあてはまる適切なことばを、本文中から六字でぬき出し、そのまま書きなさい。

問四 本文29行目「③伝承されてきた昔話の本当の姿」とありますが、その説明として適切なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア シンプルな言葉で書かれていても、色彩豊かに描くイラストが細かい所まで伝えられるような話。  
イ 同じ言葉と同じ絵のくり返してあっても、耳と目の両方からの情報で理解を深めていくような話。  
ウ 絵によって表現されていなくても、耳で聴いた言葉だけで頭の中にイメージがわいてくるような話。  
エ 大切なメッセージが書かれていなくても、クリアな語り口によって作者の意図がみえてくるような話。

問五 本文36行目「④人の声は不思議な力をもっています」とありますが、「不思議な力」の具体的な内容を「くこと」に続くように本文中から二つぬき出し、そのまま書きなさい。ただし、一つは十七字で、もう一つは十三字でぬき出しなさい。

問六 本文50行目「⑤子どもの生きる力を励ましてくれる」とありますが、その理由として適切なものを次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 守られているのを感じながら、昔話の主人公をおとしめる悪への恐怖心を消すことで子どもの安心感を抱かせるから。
- イ 語り手からの愛情を感じながら、困難に立ち向かっていく昔話の主人公に共感することで子どもの自信につながるから。
- ウ 大人からの愛情を感じると同時に、昔話に描かれる大人へのあこがれを抱くことで理想の姿を思い描くことができるから。
- エ 家族から愛されているという事実と、昔話の主人公が多くの人から愛されるという記憶が重なって強い愛情になるから。

問七 あなたのにに残っている昔話を、そののに残っている理由とともに書きなさい。ただし、次の「注意」にある条件にしたがつて書きなさい。

〔注意〕

- ・ 作品名には「」をつけること。
- ・ 二文以上で書くこと。



### 問題三

次の文章は、『くちびるに歌を』（中田永一）の一節です。これを読んで、あとの各問いに答えなさい。

長崎県五島列島のある中学校に通う三年生「桑原サトル」は、思いを寄せる「長谷川コトミ」に誘われ、合唱部に入部した。課題曲が決まり、コンクールに向けて始動した合唱部だったが、男子部員と女子部員の間に溝ができたまま、ゴールデンウィークを迎えていた。

1 僕は、このような場所で、①クラスメイトなどの顔見知りには遭遇してしまふことが苦手である。ほとんど恐怖していると言つてもいい。だからできるだけ近づきたくはない場所だけれど、この施設に入っている書店の品揃えは魅力的だった。棚にならんでいる漫画の種類は確実に島内一である。顔をふせて、だれにも会わないよう祈りながら書店に行き、漫画や小説を買つてのこりのゴールデンウィークを家の中で過ごした。

ずっと歌わないでいると、喉がまた退化してしまふそうだった。それをおそれて、自分一人で発声練習をしたこともある。5家の中では家族に迷惑がかかるとおもひ、裏山に入つて、だれもいないところで練習をおこなつた。強い息をおなかの底から吐き出したり、「まー」や「んー」を発声する。生い茂る木々を越えて声はどこまでもひろがっていき、僕はすがすがしい気持ちになる。

後日、山のなかにおかしな鳴き声の動物がいるという噂がたち、近隣住民の間でちょっとした話題になっていた。その奇怪な鳴き声を聞いて、ちいさな子どもたちはおびえているという。役場に届けて、その動物を駆除したほうがいいのかと話しあひもおこなわれたらしい。

「おまえ、もう、裏山で練習はすんな」  
父が言った。

「わかつた。変な鳴き声の動物がおるらしいけんね。一人で山に入つて、そいつにおそわれたらこわか」  
「今まで、サトルがそいつに襲われんでよかつたばい」

母もそんなことを言う。②僕と両親は、動物の正体にうすうす感づいていたけれど、しらないふりをしてやりすごした。

2 休みが明けて、ひさしぶりの教室で授業をおこない、給食を食べた。放課後、合唱部の練習のため第二音楽室に行つてみると室内にはだれもいない。そのうちだれか来るだろうとおもひ、荷物をおろして待っていたら、引き戸が開いて長谷川コトミが室内に入ってくる。

「桑原くん、早かねえ。さつきエリに聞いたけど、今日、先生は用事があるけん来れんとして」

長谷川コトミが荷物を部屋のすみにおろす。第二音楽室はしずかだった。部屋の外から、運動部のホイッスルの音や、帰宅する生徒たちのにぎやかな声が聞こえてくる。部屋にふたりきりという状況が僕は苦手である。耐えられなかったため、この場を逃げだし、図書室で時間をつぶしてこよう。部屋を出ていこうとしたら、長谷川コトミが言った。

「ふうん、桑原くんもさぼる気ばいね。ほかの男子とおなじ、柏木先生目当てばいね」

「え？ ち、ちがうよ！」

「帰る気じゃなかと？」

「荷物、ここに置いてってるじゃん」

「なんだ、柏木先生がおらんけん、帰るっておもった」

僕も他の男子と同様に柏木先生が目当てで入部したのだとみんなにはおもわれている。③その誤解はあえてそのままにしていた。本心を言うひつようなんてないのだ。

「じゃあ、どこに行くと？」

「図書室で時間つぶしてこようかと……」

「ここにおつてよ。さあ、すわって、すわって」

長谷川コトミは椅子を用意して僕にすすめる。

「実は桑原くんと話したいことがあったさ。パソコンのことじゃなかよ」

彼女も椅子を持ってきて、僕とむかいあうようにすわる。曇りのない、純真そのものといった瞳が正面にくる。僕は急にこわくなって、その場を逃げ出したくなる。こんな風にふたりつきりになれたら、普通だったらよろこぶのだろうか。僕の場合は、緊張感や、なにかミスをして嫌われるんじゃないかという不安のほうがまさってしまふ。

「話したいことっていうのはね、男女間の微妙な関係のことよ」

「……④男女間の微妙な関係？」

「そう。最近、合唱部内で男子と女子が険悪でしよう、そのことよ」

「なんだ、合唱部のことか……」

「なんのこととおもった？」

「もちろん、合唱部のこととおもったよ」

僕はすこしだけ気が楽になる。

3 「そういえば最近、部長が不機嫌そうにしてるね」



「先生がおらんところでは、男子、ちゃんと練習しとらんやろ？」

「……うん」

パート練習のとき、男声パートを指導する辻エリは大変そうだった。CDラジカセで課題曲の音を流し、男子の集団に歌わせようとするのだが、全員、やる気がなさそうにだらだらしている。

「パート練からもどってくるとき、みんな、ばらばらにもどって来るよね。練習ばさぼってあそんどったときって、そがんなるとやんね」

「でも、そんなに険悪そうには見えないけどな。男子と女子、昼休みによくここでおしゃべりしてるよ？」

向井ケイスケにさそわれて、昼休みに第二音楽室に来たことがある。室内では男子部員と女子部員が和気藹々と話していた。ぼっちの求道者である僕は、その明るい雰囲気にもまじることができず一言も話せなかったけれど。

「それはたぶん、男子肯定派の女子ばい。女子部員が今、ふたつに分裂しとるとよ」

「え？ そがんことになつてると？ 長谷川さんはどっち？」

「どっちでもなか」

長谷川コトミの説明によると、十三人いる女子部員のうち、男子肯定派が四人、男子反対派が七人いて、どちらでもない派が二人だという。

「なんてかわからんけど、ナズナも最近は『どちらでもない派』ばい。だけど、『手紙』は⑤なんとなく混声のほうで歌ってみたかよねえ。だから、私も『男子肯定派』かもしれんねえ」

「なんで混声のほうがよかと？」

長谷川コトミは立ち上がって自分の鞆から『手紙』拝啓 十五の君へ』の楽譜を取り出してもどってくる。

「この歌には、二つの視点がある」とよ」

『手紙』という曲の歌詞は、『僕』という視点人物の一人称で書かれている。

ただし、『十五歳の自分』と、大人になった『現在の自分』という二人の『僕』がいるのだ。

拝啓 この手紙読んでいるあなたは どこで何をしているのだろうか

十五の僕には誰にも話せない 悩みの種があるのです

未来の自分に宛てて書く手紙なら

きっと素直に打ち明けられるだろう



今 負けそうぞ 泣きそうぞ 消えてしまいそうな僕は  
誰の言葉を信じ歩けばいいの？

ひとつしかないこの胸が何度もばらばらに割れて  
苦しい中で今を生きている  
今を生きている

「【十五歳の自分】が未来の自分に手紙を書いたって設定よね？」

曲の冒頭部分を小声で口ずさんで長谷川コトミは言った。

「ここは女子が歌うことになってると。男声はあくまでも背景の一部。そして次の【現在の自分】が語るところはね……」

拝啓 ありがとう 十五のあなたに伝えたい事があるのです

自分とは何でどこへ向かうべきか 問い続ければ見えてくる

荒れた青春の海は厳しいけれど

明日の岸边へと 夢の舟よ進め

今 負けないで 泣かないで 消えてしまいそうな時は

自分の声を信じ歩けばいいの

大人の僕も傷ついて眠れない夜はあるけど

苦くて甘い今を生きている

「大人になった【現在の自分】が、【十五歳の自分】に返事ばしてるって設定ばい。この部分、混声合唱だと、**ア**から入るとよ。低い声で子どもころの自分 **イ** 語りはじめるわけ。【十五歳の自分】は女子の高い声を中心になって、【現在の自分】は低い男声を中心になってるとき」

長谷川コトミは僕を見る。

「変声期前の【僕】と、変声期後の大人になった【僕】ってこと？」

「そうよ。この歌詞だからできる演出ばい。高い女声と低い男声ばつかいわけて、**ウ**の【僕】と、**エ**の【僕】が表現されとるよね。この演出は女子だけではできん。男子の声がないと成立せん。やけん私、男子と歌いたいと」

長谷川コトミはそう言うど、すこし照れたような顔になる。

「一方的にしゃべりすぎた」

「勉強になったばい」

すこしわらって、長谷川コトミは楽譜をながめる。ソプラノパートをハミングしはじめた。第二音楽室の窓にかかっているおおきなカーテンが、海から吹く風をはらんで、ゆっくりとふくらみ、ゆれる。僕は歌詞のつづきを頭の中におもいうかべる。

X 1 人生の全てに意味があるから 恐れずにあなたの夢を育てて

2 \*<sub>2</sub> Keep on believing

3 負けそうて 泣きそうて 消えてしまひ そうな僕は

4 誰の言葉を信じ歩けばいいの？

5 ああ 負けないで 泣かないで 消えてしまひ そうな時は

6 自分の声を信じ歩けばいいの

いつの時代も悲しみを避けては通れないけれど

笑顔を見せて 今を生きていこう

今を生きていこう

拝啓 この手紙読んでいるあなたが

幸せな事を願います

注 \* 1 このような場所……島のショッピング施設

\* 2 Keep on believing……信じ続けて

問一 本文一行目「①クラスメイトなどの顔見知り遭遇してしまうことが苦手である」とありますが、「サトル」が自分の性格

についてこのように考えていることを示すことばを、**3**の場面から七字でぬき出し、そのまま書きなさい。

問二 本文16行目「②僕と両親は、動物の正体にうすうす感づいていたけれど、しらないふりをしてやりすごした」とありますが、  
どういうことですか。次のように説明した時、

a · b

「サトル」と両親は、山の中の変な鳴き声の動物は

a (十五字以内)

のことだとわかっていたが、

b (十字以内)

に知られることを恐れ、確かめずにいた、ということ。

### 問三

本文29～30行目「③その誤解はあえてそのままにしていた」とありますが、どういうことですか。次のように説明した時、  
[ ] にあてはまる内容を後のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

[ ] という本心を隠すには、入部の理由を誤解されていた方が都合よい、ということ。

- ア 実は、あまり人と関わりたくはない  
イ 入部のきっかけは長谷川コトミへの思いである  
ウ 長谷川コトミの前で失敗をしたくない  
エ 本当は合唱が大好きなのだ

### 問四

本文40行目「④男女間の微妙な関係?」とありますが、「サトル」は、「長谷川コトミ」の話の内容をどのようなものだと考えていましたか。次のア～エから一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 長谷川コトミの交際相手についての相談  
イ 合唱部の男子と女子の争いの解決法  
ウ 合唱部の男子の柏木先生への態度についての批判  
エ 男子肯定派と否定派の考え方の違い



問五 本文88行目 **ア**、89行目 **イ**、93行目 **ウ**、**エ** について、次の(1)～(3)の問いに答えなさい。

(1) **ア** に、「男声」か「女声」のうち、ふさわしい方を書きなさい。

(2) **イ** にあてはまる、適切なひらがな一字を書きなさい。

(3) **ウ**、**エ** にあてはまる、対比関係にあることばを本文中からぬき出し、そのまま書きなさい。

問六 本文101行目からのXは『手紙と拝啓 十五の君へ』の歌詞ですが、1～6の歌詞を、【十五歳の自分】と【現在の自分】のものに分け、その数字を書きなさい。

問七 この文章の表現と内容について述べた次の文のうち、適切でないものを次の**ア**～**エ**から一つ選び、その記号を書きなさい。

**ア** 本文2行目「書店の品揃えは魅力的だった」という描写は、「サトル」が本に親しんでいるという人物像を伝えている。

**イ** 本文21～22行目「運動部のホイッスルの音や、帰宅する生徒たちのにぎやかな声」は、第二音楽室の静けさをかえって強調している。

**ウ** 本文46行目「そういえば最近、部長が不機嫌そうにしとるね」というセリフは、合唱部のいまの状況<sup>じょうきょう</sup>を具体的に示している。

**エ** 本文99行目「おおきなカーテンが、海から吹く風をはらんで、ゆっくりとふくらみ、ゆれる」は、不安をつのらせている「サトル」の気持ちを示している。

問八 本文61～62行目「⑤なんとなく混声のほうで歌ってみたかよねえ」とありますが、「長谷川コトミ」がこのように考えるのはなぜですか。説明しなさい。